

不規則なリズムの足音の隙間に
柔らかな抑揚を見つけた
細く小さな手に引かれ
池を覗く横顔に
来年もまた触れていたいと
遊歩道を並んで歩いた
雨の落ちる音がする
庭の蛙が
角砂糖の入ったガラス瓶を睨んでいた
蓋を持ち上げる重たさが
もう何年も前の
珈琲の香りを連れてきて
溶けた甘さを溢さぬよう
麦わら帽子の記憶で掬った
赤く溶けた唇の柔らかさが
思い出を巡らせ
淡く濡れた肌を噛み
花が散る瞬間の小さな音が
深い温度になり命を産んだ
それはごく自然の流れであって
それがあるから
今の私があるのだと
まだ誰も知らないだろうけれど
扇風機に当たりながら
線香の香りを横に置き
庭の百日紅が花を咲かせている